40

「緒方春朔文書」の考察

西巻　明彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部／日本歯科大学新潟生命歯学部医の博物館

本史料は，現在，北里大学東洋医学総合研究所で所蔵されている「緒方春朔文書」である．この，来歴の一部について演者は第109回日本医史学会総会（佐倉）で発表した．緒方春朔の5代目緒方駒雄が，明治44年（1911）国立伝染病研究所に寄贈した時には，「種痘証治録」，「戴曼公唇舌口訣」，「必順弁序」，「好生諸言抜萃」，「合病併病問答」，「痘疹雑伝」，「痘疹治術伝」，「戴曼公痘唇舌秘訣」，「池田先生痘診治術伝」，「痘疹玄機」，「新鍥御院秘伝補遺痘診弁疑全幻録」，「池田錦橋先生著痘瘡唇舌図」と緒方春朔先生考案種痘用器具一式であった．現在，北里大学東洋医学総合研究所で所蔵されている「緒方春朔文書」では，「種痘証治録」，「必順弁序」，「好生諸言抜萃」，「合病併病問答」と種痘用器具一式が失われている．緒方駒雄宛の国立伝染病研究所からの書簡には，「拝啓先般別記書冊並ニ器具御寄贈被成下御芳志感謝之至不堪今回独逸国万国衛生博覧会へ出陳之後永ク当所ニ保存記念可致候先ハ御礼迄如斯御座候　敬具　明治四十四年一月廿六日　伝染病研究所」とある．緒方春朔から緒方駒雄までの系譜は，春朔惟章―春暫惟教―春朔惟馨―春洞惟承―駒雄となる．緒方駒雄は，明治39年頃，秋月で朝倉郡初代医師会長をつとめている．現在，伝存している．「緒方春朔文書」は，初代の緒方春朔ではなく，三代目の緒方惟馨（文友）が，京の痘科医佐井聞庵に，天保9年4月から1年間にわたり，筆写した筆者本が主体となっている．このことは，「池田錦橋入門制戒禁約書」の中に，「天保九戊戌閏四月　前筑秋月家中　緒方文友」とあり，一致する．「池田錦橋入門制戒禁約書」については，第100回日本医史学会総会で長谷川一夫氏の報告がある．現代，緒方春朔といえば，鼻幹苗法で人痘法を行ったことで有名であるが，これは初代の春朔であり，三代目の惟馨が春朔を名のっていたことは，案外知られていない．このことは，春朔といえば初代春朔をさすものと考えられ，3代目春朔惟馨と混同している点がある事に注意しなければならない．北里大学東洋医学総合研究所に伝存している「緒方春朔文書」は，いわば2代目緒方春朔文書が中心となっていた．

緒方惟馨について，熊本正熙著「吾国の種痘と緒方春朔」の中で，「長元公御代天保七年申十一月父惟教遺跡無相違十人扶持相続御無足列御被仰付，弘化元年辰四月不心得の次第有之新座被仰付，嘉永元年申三月本席被仰付，安政六年未四月御納戸製被仰付，文久元年酉六年御七被仰付，文久三年亥十月願通隠居」と記されている．緒方惟馨は，天保9年佐井聞庵に入門し，池田流の痘疹治療を修めていることから，初代緒方春朔の鼻幹苗法が絶対的な予防法ではなく痘漿による毒力により事故がかなりあったのではないかと推測される．痘疹治療については，池田流が有名であるが，幕末の尾台榕堂はこのことについて「方伎雑誌」の中で，「痘ハ，小児ノ一大厄也．治療ハ発表，拝毒，清熱，疎滌，皆其機ヲ失ハヌ様ニスベシ．大底難症ニテモ，険逆症ノ外ハ救ハル丶也.」と記し，当時の痘疹治療の有効性を示唆している．

現在伝承している「緒方春朔文書」の中で，初代緒方春朔の「種痘證治録」は伝存していないが，これが初代緒方春朔の自筆本であったかどうかははっきりしない．江戸の池田家から，緒方惟馨宛の手紙に，「尚々先日御出之節，御先代之御像一軸並二種痘必順弁共二冊給御悉ク奉仕候　必順弁ハ御出板之本所持仕候　右之内ヲ御刪補之儀ト奉存候　猶又外ニ御草稿之御著述モ候ハバ御序之節御見セ可被下候」とあり，初代春朔の業績を惟馨は広く伝承していたと考えられる．今回，「緒方春朔文書」を中心として，その伝来，種痘，痘疹治療の考察を行った．